

---

# Vertrag des Bluts

灯籠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

V e r t r a g d e s B l u t s

### 【Nコード】

N 7 0 2 7 D

### 【作者名】

灯籠

### 【あらすじ】

助けた人間に裏切られ、失望したにも関わらず困っている者を見ると助けてしまう、ヴァンパイアと、契約した人間の物語。

## **V e r t r a g (前書き)**

人間批判が多いので苦手な方は避けてください。

## V e r t r a g

V e r t r a g d e s B l u t s

「何で私が貴方の使用人などやらねばならぬのです!!!」  
そういうと少女はキツと青年を睨みつける。

「五月蠅いなあ・・・『契約』したでしょ？」

そう言いながら横たわっていたソファからゆっくりと起き上がる。  
自分が選んだことに責任も持てないのか？

「だからって!!!」

なんか妖艶。不覚にも見とれてしまった・・・どうしよう、私

「君はもう『人間』じゃないの、わかる？」

助けられた恩を知らないんだね、この子は。

「それは・・・。」

なんか、目が据わってるし

「君が選らんだんだよ。僕の血を飲むってさ」

この子はかなり楽しめそうだ。

「確かにそうですが・・・。」

なんで、なに。否定しなきゃいけないって。どうしてそう思うの？

「君は僕が居なきゃ生きていけないんだよ。だから僕が君をどうしようとするの勝手なの。」

でも、ちよつと黙らせなくては・・・ね。

「そんな、」

「僕さあグダグダ優柔不断なヤツ嫌いなんだ、捨てるよ、君を。それでもいい？」

このくらい言えばビビるだろ。

「すいませんでした。」

一応謝つとけばいいよね

「わかったならいいよ。君を飼ってあげる、おいで。」

そついうと満面の笑みで両手を伸ばした。

「一応って。本当におもしろい

「嫌です。」

飼ってあげる？ふざけんなっ何様だよ！

「そう、主人の命令に従えないヤツはどうかで餓死してればいいよ。

」

めんどくせー

「血液位、いくらでもあります。」

「あはは、君はおかしいね『狩り』もしたことないヤツはやり過ぎてハンターに捕まるよ、そしたら君はあの世行き・・・確かにそれも面白いね・・・。」

さあ、次はどう出るかな？

「そんなぁ・・・。」

## Vertrag(後書き)

遅くなつてすいませんでした。

黒蝶の後継と平行して更新しますので、  
どうぞ宜しく願います。

灯籠

## F r e u n d l i c h e r   J u n g e

さあ、僕はやさしいから、君に選ばせて上げるよ、邑。」

言いながらきつく締められたネクタイをゆるめた。

「どうする。僕に飼われる、それとも……。」

「よろしく願いますご主人様。」

選択肢なんて結局一つしかないじゃない！

「クク、素直な子は好きだよ僕。」

「嫌、近寄らないで！！怖いつ！！！」

そういつて後ずさる。

「そう？残念。怖がられちゃった……。」

全然残念そうではない。

あの、『優しい男の子』はどこ？

時は少し遡る

今宵は綺麗な満月の夜。

一人息絶えそうな少女がいた

（痛い、なに、私死ぬの？）

そうだよ。と言う悪魔のささやきが聞こえてきそうだ。

幸い彼女を刺した無差別殺人犯は既に逃げていったが……

今は……不幸にも真夜中、叫んでも声など届く場所に人は居ない。  
立ち上がって助けを請いにいこうとしても、急所を刺されているために不可能だ。

そう、彼女は絶対絶命瀕死の状態。

それでも彼女は叫んだ

と言つても、瀕死の状態でどんなに頑張ろうと人に届くほど大きな声など、でやしない。

「助け……てっ……死に……たくな……い！……私は……  
まだ……生きていたいっ！」

もうだめかと思ったとき、目の前に一人の少年が現れた。

「その願いは本当？」

「本……当よ。」

「じゃあ、僕と契約する？」

このとき思考回路が既に停止していた彼女は

「するわ。」といってしまった。

これがすべての始まりである。



**F r e u n d l i c h e r   J u n g e (後書き)**

読んで頂けて光栄です。

宜しければ感想など頂けると嬉しいです。

灯籠

## D i e s e   W i r k l i c h k e i t

「ああ、喉が渴いちゃった。」

さあて、どうするかなあ？

「はい、紅茶です。」

私の近くに紅茶の嫌いな人はいなかったから、紅茶なら大丈夫よね・  
・。

「分かってないなあ、僕の喉を潤せるのは・・・血液だけだよ？」  
吸血鬼に紅茶を出すなんて面白いなあ。

「はあ、すいません。」

なんか、今すごいこと言われなかった？

「・・・・・。」

ジリジリと近寄ってくる

「あ、あのなんですか？」

「ははっ本当は分かってるくせに。君、面白いね。」

「え、嫌ッ！！！」

「五月蠅い。黙れ『動くな』！！！」

少女は必死にもがくが

（え、体がビクともしない？）

「あはは、それじゃ遠慮なく・・・。」

「え、ヤダ！やめて怖い。」

プツツという音と共に首筋に牙が立てられる。

「いっつ、あ・・・がつ！！！」

「・・・・・。」

ジュルツという音が邑の全身に響きわたる

「嫌・・・だ、気持ち・・・悪い。」

「次期なれるよ。」

「・・・う、う・・・。」

「ご馳走様でした。」

「最悪！！！」

殴ろうとしたその時・・・邑の視界がグニヤリと曲がりそのまま倒れてしまった。

「あーあ、今は多量の血を抜いたのと同じ状態だから貧血になったんだね、可愛そうに……。ちよつと君。」

「はい。」

「コイツを寝台に運んでやってくれ。」

「御意。」

控えていた使用人が部屋を後にしたのを確認すると、<sup>る</sup>屢夷は先ほど邑が入れた紅茶を飲んだ。

「旨いな。」

**D i e s e W i r k l i c h k e i t (後書き)**

読んで下さりありがとうございます

灯籠

「無事運び終わりました。」

主様が紅茶を呑んでいる・・・紅茶嫌いは克服されたのかしら？  
見間違いではないかと目を擦る。

しかし、目の前の主　　屡夷るい　　は確かにティーカップに注がれた  
紅茶に口をつけている。

不意にそのカップから口が離され、こちらも向かずに口が開かれる。

「そうか、ご苦労。」

「今後はいかなさいますか？」

たしか予定はなかった筈よね

「少しの間この屋敷に滞在するでしょう。」

面白いモノも手に入ったことだしこの屋敷にいるのもいいかな

「しかし、協会に見つかってしまうのでは？」

やはり、今宵の主様はどこかおかしいわ！

「そこらへん抜かりはない。」

協会ね。

「ご意思に従いましょう、主様。」

その後しばし続いた沈黙を破ったのは意外にも屡夷るいだった

「人間界など、所詮ゴミたちの溜り場だ。」

そう言われた稀羅は事態が読み込めず目を見張る

しかし、ここは長年この主に仕えた稀羅だ　　すぐに主の望む応え  
をはじきだす。

「いかにも、神にも悪魔にもなれない中途半端なモノたちの集まり  
ですわね。」

紅茶を呑むなど、久しいな。

そういえば昔毎日紅茶をいれてくれた人がいたな

『私はね。紅茶の中ではダージリンが一番好きなの。』  
遠い記憶が昨日のここのように甦る。

「そう、昔それでも人間界に帰るといった愚か者が居たな。  
俺はアール 그레이が好きだったよ  
それは紅茶の好きな『彼女』が唯一嫌いだったもの。」

H i n t e r   G e d & a m p . : a u m l . : c h t n i s ( 後 書 き )

読んで下さりありがとうございます。

灯籠

# Wirklichkeit

「はい、お手紙沢山届いておりますよ？」

何かを思い出しているのかしら。

「そうか、全て火にくべてやれ。」

やはり、言うべきではなかったか。

「はい。」

「愚か者の書いた手紙でも、暖炉の肥やしくらいにはなるだろう。」

「はい、其の手紙ちよつと待ったあ……！」

「なんだ、お前もう起きたのか？」

「おう、兄貴……それにしても相変わらず残酷だよなあ、兄貴つて。」

「お前だって人間は愚かだと思っただろ？」

「ああ、起こさなくていい争いは起こすし、自分が一番不幸だと思つてゐる節とか見てるところ、なんていうか串刺しにしてやりたくないよな、ああいうヤツの血を吸う位なら飢えて死んだほうがましだしや。」

言いながら目は稀羅から受け取った手紙を追っている。

「お前悪趣味だぞ。」

「いやあ、こう死にそうなやつからの血文字って見てて楽しんだよ。」

L

本当になんで逃げ出した奴がわざわざ手紙なんか寄こすのか……。

「そういうのを悪趣味というんだ。」

「ええなにに？」「屡夷<sup>るい</sup>様あの時のこと・・・とても反省していません、どうか、どうか私をお許してくださいこの醜い世界から連れだしてください」？ふ、ふはははははははははは！！！」

一通り、笑ったあと。涙目で稀羅を見ながら言う

「自分で選んだ道だ、自分で何とかしろつての！……サンキュ、稀羅もう燃やしてくれてかまわないぞ。」



「はい。」

「そういえば兄貴、新しいやつが入ったのか？」

「なんか他人の匂いがあるんだよなあ。」

「ああ、また気まぐれを起こしてしまつてな・・・。」

「私も、愚かだよな　　紅茶をいれてくれたあの人に見えるなんて。」

「おいおい、また人間かよ。」

「ああ。」

「兄貴は優しすぎるんだよ。」

Wirklichkeit (後書き)

読んで頂きありがとうございます。

灯籠

## E s i s t f r e u n d l i c h

人間なんかいつも拾ってくるなよな、追い出すの大変なんだからよ  
「俺が？この俺が優しいって、ははは。お前もう一度寝て来いよ。」  
氷の微笑を持つ霸王と言われているこの俺が？

「寝ばけてなんかいねえよ！可愛そうなヤツ拾うから、裏切られて  
傷つくんだよ。」

知ってたんだぜ？兄貴がいつも隠れて落ち込んでいることくらい

「俺は、傷ついてなんかいない。」

傷つけることはあっても傷つくことはない。

「隠すなよ、双子の俺にはバレバレなんだよ！！！」

双子は忌み嫌われる存在。その表に立って俺を守ろうとしてる奴の  
言うことかよ？

「お前・・・今日、おかしいぞ・・・なんか変なもん食ったか？」

双子ね。お前が当主でなくて良かったよ・・・。

「俺は人間みたいに拾い食いなんかしねえよ、ただ兄貴が傷つくの  
みたくないんだよ。」

いつも貴族会議で「なりそこない」扱いされてるのに一言くらい相  
談してくれよ。

「俺が、思うにお前のほうがやさしいぞ、屢軌」

そう言われて弟の顔が赤くなるのはいつものこと。

「ば、俺が優しいのは兄貴にだからだよ。」

またはぐらかされた。

「お前、気持ち悪い。」

本気で思っているらしく鳥肌が立っている。

「ひどいなあ、兄貴い・・・可愛い弟がそんけーしてるって言うて  
るのにさ・・・。」

「は、誰が可愛いって？」

「うわぁーショック！！！」

「はいはい。分かったお前は可愛いよ。」

昔は可愛かった。

「なんか納得いかねえ。」

沈黙の後うかがうようにメイドが口をはさむ

「主様……。」

「なんだい？」

「お客様がみえております。」

来たか。と三人が思った

「今、行くよ。」

「はい。」

そういうと頭を下げた。

「行つてらっしゃーい。」

満面の笑みで手振っている弟を半殺しにしたい……と思ったのは  
心の中に秘めておこう。

「少しの間、此处を空ける、くれぐれも留守番頼んだぞ？ 弟よ。」  
窘めるように少し強い口調で言ったがあまり効果はなかったようである。

「OK！」

その言葉に頷いて、屢夷が出て行ったのを確認すると……。

## **E s i s t f r e u n d l i c h (後書き)**

読んで下さりありがとうございました  
続きも頑張って更新しますので何とぞおねがいします。

## **D r o h u n g (前書き)**

更新が遅くなつてすいませんでした

## Drohung

「さあつてと、そろそろ頃合かな？」

そうつぶやきながら、邑の部屋に入っていく

「おい、起きろよ！！！！人間。」

不機嫌丸出しの顔は兄に瓜二つだ。

「……………」

「起きろつて言つてんの！！！」

「う、え？」

「あ、やつと起きた。」

「は？」

さつきと口調が違う？

「あのさあ、人間の分際で俺たち仲間の中に入ってこないでくれる？」

「はあ？」

「はあ？じゃねえよ！！！！」

「出てけつて言つてんの。」

「え。」

「俺は、お前が死のうが、拷問に掛けられよーがどーでも言い訳。」

「はあ……………」

「何言つてるか分かるか？」

「さっぱり。」

「そうか、人間の弱い頭じゃ理解できないか。」

「そういうわけでは。」

「じゃあ、何だつての？」

「私は、此処以外帰る場所がないのです。」

「そうか、兄貴を裏切らないって誓えるか？」

「それは……………」

兄貴つてことは…………アイツには弟がいたのか。そして目の前にい

るのが弟？

「誓えないなら、今此処で八つ裂きにしてやる。」

「ち、誓います。」

こ、怖っ・・・なんなの？

「その言葉に偽りはないな？」

偽りも何も意味がわからないわ。

「はい。」

「裏切ったときは死んだほうがマシな人生を歩ませてやるから、覚悟しろ。」

「はい。」

余裕が生まれてきた邑は本当に顔はそっくりね。とか考えていた

「・・・・・・。」

「あの・・・・。」

「何だ？」

「お腹が空いてしまつて、如何すれば良いのか分らないのですけど・・・・。」

「はぁ・・・、これを飲んでおけ。」

溜息と同時に屢軌の顔が柔らかいものになっていく。

今回の人間は面白いな・・・初の姫になるか？

「え、何ですか？この赤い液体は。」

「血液。」

顔色も変えずに答える少年にやはり人ではないのだということを実感させられる。

「だ、誰の？」

まさかこんなものを飲むようになるとは。

「この屋敷の使用人のだ。」

まあ。人ではないけど・・・・。

「その様な・・・・。」

やっぱり、飲めない。

「飲まなくても、いいぞ？貴様を八つ裂きにする必要はなくなるだ



けだからな。」

また、険しくなった少年の顔に諦めがついた邑だった。

「いえ、頂きます。」

そついうと屢軌からコップを受け取った。

「うぐっ……。」

「ははは、やはりすぐには嚥下できないか……。」

心底楽しそうに笑うところも兄にそっくりだそう邑は思った。

まあ、双子なのだから当たり前だが……。

「喉に絡み付いて気持ち悪い。」

今にもうええと言いそうな顔に笑いをこらえるが……

「ぷっ。我慢しろ、飲み下したらジュースをやるから。」

「はい。」

え、笑った？

こんな怖い人でも笑うのね……。

そついうと邑は顔をしかめながらすべて飲み干した。

「よくやったな……はいよ、約束のジュース。」

何故か年下に頭をなでられたのに嫌な気がしない。

「ありがとうございます。」

そついうと、少しずつ嚥下していく

私。弟のほうは好きかも。

## Fragment

「ん。」

屢軌がそう言いながら手を出してきた

「え？・・・あ、はい」

コップを渡すと沈黙が流れた。

「・・・・・・・・。」

「俺の顔になんかついてるか？」

じつと見つめられていたのが気に障ったのか少し不機嫌な顔になる。

「いいえ、ただ・・・。」

「ただ？」

「思ったより優しい方なんだな・・・と。」

「兄貴よりも？」

今日はその話にとんと縁があるようだ。

「ええ。」

「兄貴は優しいいつつか、甘いからな。」

「そう、何ですか・・・。」

全然優しそうには見えないけれど。弟には優しいのかしら？

自分が助けてもらったことを棚上げしていることに気づいていない。

・・・。

「ああ。」

わかりにくいけどな。

「だから、傷つくのに・・・やめないんだ。」

「はあ・・・かわいそうですね。」

そんな人には見えないけれど。

「同情してもどうにもならんからな、周りで支えてやらないと・・・。」

。

本当に無茶ばかりしてくれる兄で・・・。

「やはり、貴方はお優しい。」

支える・・・か。

「あはは、人の必死の願いをいとも容易く踏みにじるけどね。俺は。」

「なんか、手玉に取られてねえか？俺。」

「それも、お兄様を思つてのことでしょう？」

「そうだね、兄貴のためなら悪魔にも天使にもなれる自信がある。」  
「やっぱ面白い女。」

「吸血鬼の口から、悪魔や天使などと言つ言葉が出るとは驚きです。」

「信じているのかしら？」

「一応下界にも、興味はあるから・・・。」

「そう言つと少しほほ笑んだ。」

「では、私がお話しましょうか？」

「一応神官に身を置いていたのだから少しは役に立つよね・・・。」

「次の機会に頼むよ。」

「この女聖職者か。」

「はい。」

「次つていつかしら。またお話できるのが楽しみだわ」

「・・・」

「すいません、貴方の名をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「俺か？俺は屢軌。」

「屢軌さん。」

「屢夷と一文字違いなのね・・・さすが兄弟だわ。」

## Wahnvorstellung

「屢軌でいいぜ？」

そう言つと手に持つていたコップをベッドの横の机に置きその長い指をからめて手を組み始めた……。

「屢軌、私は邑です。人であるころ聖職者に身を置いていました。」  
突然、俯きながら淡々と話し始める邑

「そうか。」

やはりな、しゃべり方があのいけすかない男に似ているはずだ  
「それでえつと屢夷様は？」

「今出かけてるからそろそろ戻つてくると思つぜ。」

兄貴のことだもうおそろく扉の前に立つているだろう……。

「お、なんだか仲良くなつてるね。」

「え？」

驚いた。先ほどの少年と違い青年の姿で 私を助けたとき  
の姿で目の前に現れるなんて……やっぱり人間じゃないのね。

「兄貴。」

「ああ、そうだ邑。」

少しだけ弟の方に顔を向けて言う

その眼は鋭く光っているがここは気にしないでいよう……。

という弟の態度がうかがえるが邑は何せ鈍いので気がついてはいなかつた。

「はい？」

「僕のこと屢夷でいいよ。」

弟に妬くななんてらしくないな……オレ

「あ。はい……。」

突然なんなんだろう？

「やっぱり、まだ怖いよね？」

「え、まあ。」

なんか嫌だなこの空気・・・。

「俺、散歩行ってくるな?」

さつき僕って兄貴が言ったよな・・・。なんか鳥肌立ったし。

「ああ。」

気を使うか・・・アイツらしいな

「行つてらっしゃい。」

逃げたわね!

「ふう、なんか自棄におとなしいね?」

もつところ騒いでなかったっけ?

「そう、ですかね?」

「ああ、何かあったの?」

「いえ、別に、何も。」

「そうか、アレは飲めたようだね。」

おそらく答える気のない邑にこれ以上聞いても無駄なので、話を変えた

「アレ?」

「そう、血。」

匂いがするし、コップがあるってことは屢軌じゃないな。

「ああ!」

「どうだった?」

渴きを潤すには仕方がないが・・・いきなりだと、大丈夫なのか?

「どうもなにも、喉に絡みつくし、鉄臭いし、吐き気するし、飲めたものではなかった。」

吐き出してしまいそうだったわ

「そうか・・・まあ、じきに美味しくなるよ。」

味だって十人十色だから飽きないし

「はあ、確かに・・・不思議と乾きは潤せたけど。」

何でなのかしら

「まだ飲み難い？」

タブレットもあるにはあるんだが・・・

「うん。」

毎回は嫌だわ

「じゃあ、ちよつとの間これを飲んでおいて？」

そういうと錠剤の沢山入った袋を手渡した。

少し副作用が心配だが・・・仕方がないだろう

「え？」

何？薬物濫用者みたいじゃない

「血液の成分を固めた錠剤。」

母上もなぜ袋で寄越すんだろう

「でも、あの？」

怖い・・・なんなの？

「一回3錠を毎食後に。」

「はい。」（うわあ、不味そう。）

「お子様用に甘くしてあるから心配しなくて大丈夫だよ」

糖衣錠ってヤツだ！

「だ、誰がお子様よ！私より年下のヤツに言われたくないわ！！！」

失礼しちゃうっ

「はあ、だからあ僕は君より300年以上は長生きしてんだから。」

あ。怒った

「わ、私もこれから長生き？」

「そうだね。そういうことになるね・・・うん。」

何故か上目づかいで聞く邑にニコニコしながら答える

「なに一人で納得してんのよ！」

笑顔が気に入らなかったのか邑はすごんだ

「いやあ、今君に血を与えるべきじゃなかったと思って・・・。」

少し残念かな

「はあ？」

何言ってるのコイツ

「吸血鬼はさ、成長が人間に比べてそれは目に見えて遅いわけ。」  
早かったら俺もうジイさんか・・・

「だから？」

「だからなんだつてのよ!!!」

「君が妖艶な美女になってから与えたら数十年そのままだったのに。残念」

全く残念そうではない。

「あんたそれでも当主なの？」

「はは。そうだね・・・会議に出ることが妄想でないなら、そうだよ。」

ニコニコ顔で言うのだから真実味があって怖い

「い、言い返せない。」

妄想かも。

「はは。年の功だね。」

そのころドアの前では。

（ふう。アイツ兄貴には心許しまくってんじゃん・・・八つ裂きにする必要は。。

なさそうだな。）

「おや？」

「しっ。」

「申し訳御座いません。」

「いやいい、それよりさあ。俺腹減っちゃった。」

「はあ。先ほど食べたばかりでは？」

「そっちじゃなくてこっち。」

そういつて牙を指差した。

「はあ、でも場所を変えましょう。」

「ここじゃだめ？」

そついうとメイドの髪を掻き揚げた

「え、ちよつと・・・あの・・・その・・・。」

その目で見ないで・・・

「ねえ、いいでしょ？痛くしないからさあ・・・。」

「でも、その。」

一瞬屢軌の表情が変わった

「ちよつと、伏せてじつとして。」

「え。はい。」

次の瞬間ドアから、物凄い速さで短剣が飛んできて壁に刺さった。

「あつぶねえ。」

「お前が使用人に絡んでるからだろ？愚弟。」

「ひつでえ！ 邑は兄貴のだから手を出さなかったのに。」

「賢明な判断だな。」

今にもフンつと言いそうだ。



「もういい。」

「え？」

「兄貴の飲むから。」

「お前、ちよ。やめ・・・おい。」

ブツリ

数分経過・・・

「ふう、兄貴のはやっぱり旨い。」

「お前。俺が腹減っただろ？」

「そ、じゃあ・・・後はごゆつくり。」

邑をちらつと横目で見ると去って行った

「えっと、その私も・・・」

「だーめ。僕お腹減っちゃったんだから。」

「まさか・・・私の血を飲みたいと？」

「そう。そのまさかだよ。」

「嫌ですよ、痛いもん。」

「あはは、そんなに痛くしてほしいのか。」

「逆です逆!」

私遊ばれてるよね？

「逆の逆？」

つまりお姫様は痛いのが好みと・・・いうことだな

「ちがーう!!!」

言葉が通じていない・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7027d/>

---

Vertrag des Bluts

2010年11月4日01時14分発行